

「初夏のキノコ(6)」

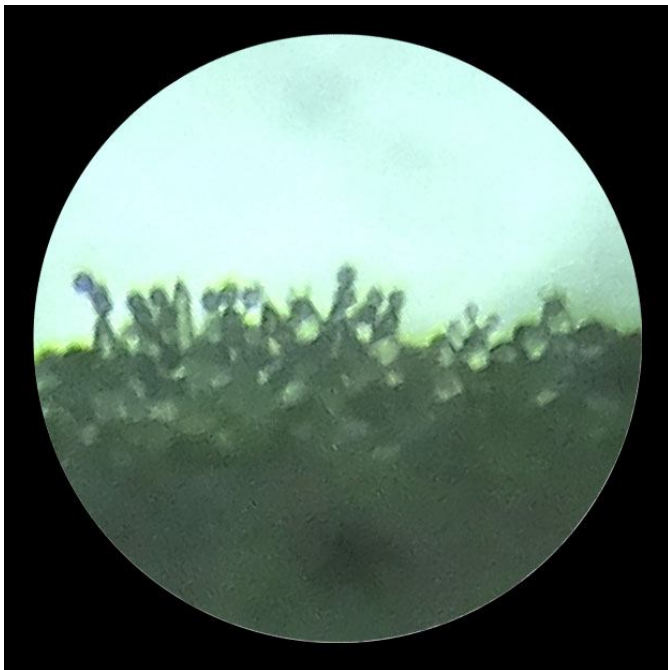
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

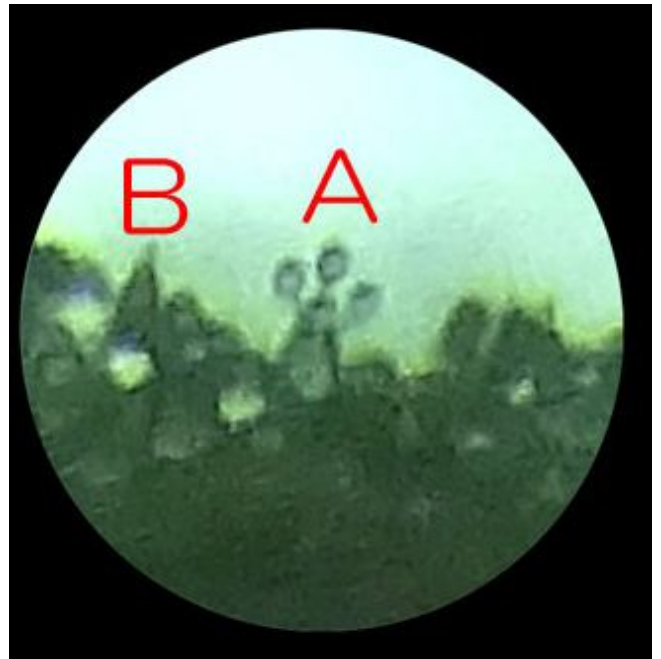
田中 千尋 Chihiro Tanaka



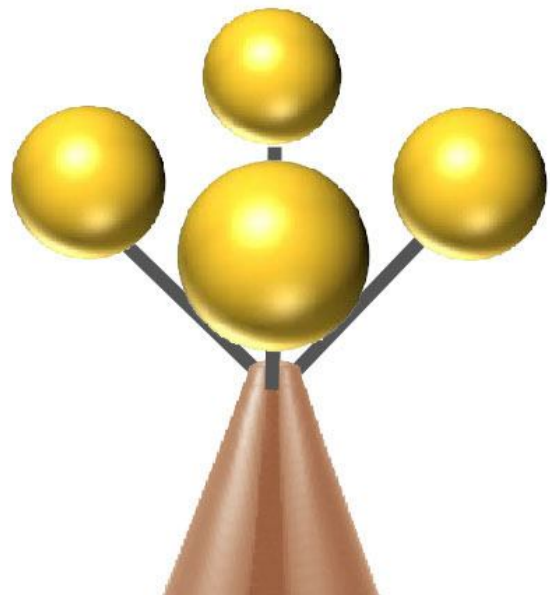
まずは、ヒダ本体の真上から観察してみた。最初は何も見えなかったが、透過光(LEDランプ)を強くすると、胞子が見えてきた。どうやら、一つの担子器に4個の胞子がついている構造のようだ。



次にヒダの下縁(傘の反対側)を観察してみた。ここには、球状の胞子が密集しているのがわかる。下から(実際には上から)担子器と思われる突起も見られ、そこに胞子がいくつついているようだ。



更に倍率を上げて、ヒダの縁を「搜索」してみた。なかなか眼が疲れる作業である。Aは一つの担子器に、4個の胞子がついている。担子器と胞子は、細い針金のようなもので結合されているようだ。Bは担子器のみが残っているように見える。すでに胞子を飛ばしたあとの残骸なのだろう。



(作図 ; C. Tanaka)

「カワリハツ」の担子器は、恐らくこのような構造なのだろう。三角コーンのように、先端が丸くなった円錐状の担子器に、胞子が4個ずつ形成されるようである。胞子は、成熟するまでは子実体に留まらなければいけない。しかし成熟後は子実体が腐ってしまう前に、すみやかに飛散する必要がある。細い針金のようなもので胞子を支えているのは、風や重力で担子器から胞子が離れやすくする工夫だろう。